

後期第 11 回 WS 「水と土の芸術祭と小須戸ARTプロジェクト —都市型芸術祭と地域アートプロジェクトの関係性—」 講義録

【日時】2018年12月21日（金） 18:30~21:20

【場所】大阪市立大学 梅田サテライト 105 教室

【講師】小須戸コミュニティ協議会薩摩屋企画委員会委員 石田高浩氏

【ファシリテーター】大阪市立大学大学院都市経営研究科 吉田准教授

新潟県新潟市の小須戸小学校区コミュニティ協議会（現小須戸コミュニティ協議会）薩摩屋企画委員で、2013年以降「水と土の芸術祭」の市民プロジェクト等として小須戸ARTプロジェクトを企画・運営され、行政職員も経験された、石田高浩氏に、ご講義を頂いた。

1. 「水と土の芸術祭」について

新潟県内で行われる大きな芸術祭には、「水と土の芸術祭」以外に「大地の芸術祭」がある。「大地の芸術祭」は「水と土の芸術祭」に比べ規模も大きく、実績があり、継続のしかたが上手く、戦略的である。「水と土の芸術祭」と「大地の芸術祭」の比較は下記の表による。

「大地の芸術祭」と「水と土の芸術祭」

	大地の芸術祭	水と土の芸術祭
主催	大地の芸術祭実行委員会 十日市町、津南町、新潟県、NPO 法人越後妻有里山協働機構 他	水と土の芸術祭 2018 実行委員会 新潟市 他
開催年	2000年に初開催。以降3年に1度	2009年に初開催。以降3年に1度。
開催地	新潟県十日市町、津南町	新潟市
財源規模	約6億2500万円（2013年～2015年の3年間）	2億7000万円（2018年予算）

※講義のパワーポイントを転記

「大地の芸術祭」と「水と土の芸術祭」は同じ年に開催されており、新潟では2つの芸術祭が3年に一度行われている。

「水と土の芸術祭」は今年で4回目となり、2018年7月14日～10月14日に開催された。来年、新潟港が開港150周年を迎えるにあたり、記念事業という位置づけで行われた。

「水と土の芸術祭」の基本理念は、「私たちはどこから来てどこへ行くのか」である。その背景には、2005年の平成の大合併がある。平成の大合併では、広い範囲が合併し、人口80万人の政令指定都市として新しい新潟市が誕生した。「水と土の芸術祭」は、広範で多様な歴史背景を持つ新しい新潟市において、アイデンティティを「水と土」に見出し、芸術祭によりそれを模索するという試みとなった。

実行委員長は新潟市長である。

「水と土の芸術祭 2018」は、〈市民プロジェクト〉、〈こどもプロジェクト〉、〈アートプロジェクト〉、〈シンポジウム〉、〈いがた JIMAN〉の5つから構成されており、今年から新しい試みとして、市民プロジェクト84件中12件が〈地域拠点プロジェクト〉、それ以外が〈（一般の）市民プロジェクト〉（72件）という位置づけになっている。

芸術祭の目玉となるのが、〈アートプロジェクト〉である。アーティストを招聘するなど

し、新潟の地勢的な成り立ちや暮らし文化に深く根ざした芸術性の高い作品を制作展示した。今年は 38 作家、48 作品であった。新潟市の中央区（旧新潟市）を中心に展示がなされた。国際展と謳ってはいるが、基本的には国内の作家が多い。

〈シンポジウム〉は芸術祭の取組みと連動して、トークイベント等を会期中に 2 回行った。

〈こどもプロジェクト〉は、子供達を対象とした事業が区の単位でいくつか行われた。

〈にいがた JIMAN〉は、食や農・伝統芸能など新潟市の誇る豊かな文化を広く PR するイベントを行った。

〈市民プロジェクト〉は「水と土の芸術祭」の特徴と言われている。これは、市民が自ら企画運営を行う、市民と地域が主役のプロジェクトである。アーティストを招聘したアート作品の展示やまちあるきなどのほか、まちづくりなど多彩な内容で市民の企画した事業を行う。これにより、市民や地域が主体となりかかわることが出来る参加性の高い芸術祭となっている。

〈地域拠点プロジェクト〉は、区内の市民プロジェクトの広報・連携の核となる拠点を設け、市民プロジェクト間やアートプロジェクトとの連携を図る体制を整え、アートを活用して地域の課題に取り組むものである。

→臼井アートプロジェクト（地域の祭りである「狸の婿入り行列」を盛り上げる狸グッズを、作家を招いて地域の方と一緒に作り、一軒の古民家を利用して作品展示を行った。今年は「狸の婿入り行列」を演出するダンスの振り付けを、子供達と一緒に行った。ダンサーを地域に入れて子供達に振り付けを指導し、それを祭りの当日に発表してもらった。また、同区内の白根地区において行われる白根大凧合戦で落ちた凧の紙を使ってハリコのオブジェが作られた。これらは地域の資源を使った作品といえる。）

→礎窯 ONE MORE CUP STORY（新潟市中央区の外れは、少子高齢化が進んでおり、廃園となった保育園（市の所有）で、作窯体験や登り窯での焼成、器を使ったお茶会や音楽祭を実施した。）

2. 小須戸アートプロジェクトについて

新潟県新潟市秋葉区小須戸は、江戸から明治・大正まで日本一の大河「信濃川」の川湊として繁栄した。市内には歴史的町並みが残存する。地域資源として、けんか祭りである小須戸まつり、小須戸縞、ボケの花や郷土菓子等があるが、担い手が無く、衰退の兆しが見える。さらに、町屋も多く残るが、空き家が多く、街全体が衰退傾向にある。しかし、町屋を中心にプロジェクトを行うなかで、町屋の価値が再評価され、新規出店も相次ぎ、地域連携の促進にも繋がり、回復傾向が見られるようになった。

○プロジェクトの経緯

- ・町屋・町並み保存活動（小須戸町並み景観まちづくり研究会による活動）
- ・町屋ギャラリー薩摩屋の活用（1階の空き町屋“薩摩屋”の活用への取り組み）
- ・〈地域アートプロジェクト〉への発展（水と土の芸術祭をきっかけとした活動の発展。新規出店者・協力者のネットワーク形成）

- ・2012年 水と土の芸術祭 2012
- 2013年 薩摩屋ARTプロジェクト
- 2014年 小須戸ARTプロジェクト 2014
東京で小須戸 (KOSUDO ART PROJECT in TOKYO)
- 2015年 小須戸ARTプロジェクト 2015
- 2016年 小須戸ARTプロジェクト 2016
- 2017年 小須戸ARTプロジェクト 2017
- 2018年 小須戸ARTプロジェクト 2018
- ・町屋ギャラリー薩摩屋は、2005年に空き家になった「薩摩屋」を2009年から徐々に改修整備を進めた。

3. 都市型芸術祭と地域アートプロジェクトの関係性

- 芸術祭をきっかけとした市民による活動の継続が見られる。
 - ・〈アートプロジェクト〉から生まれた〈市民プロジェクト〉が継続し、〈地域拠点プロジェクト〉に発展したケースがある。
 - ・強力なリーダーが区単位で動きを作り出したケース（南区）
 - ・市民サポーターズの繋がりで動くケースも多い印象である。
- 一方で
 - ・〈市民プロジェクト〉は補助率が高い。2015年まで全額補助。それ以降は8割補助。補助金が多いことが、〈市民プロジェクト〉を盛り上げているのか、又は補助金があるからやっているだけなのか微妙である。
 - ・審査基準が不明瞭である。そのため内容に大きな差がある。数と質のどちらが大事か。内容は誰がチェックするのか。
 - ・狭いコミュニティでの活動になりがちである。（一部の）市民が主役である。
 - ・〈市民プロジェクト〉はわかりづらいとよく言われる。要因としては、数が多すぎる、個々の団体からの情報発信が弱い。
 - ・〈市民プロジェクト〉は、アート展示のみが重要なのではなく、行ったことの記録のとり方や発信の仕方があまり考えられていない。そこまで手が回らない。
 - ・〈市民プロジェクト〉を全体マネジメントしているのは誰かがわからない。（実際にはいない）個々の集合体が〈市民プロジェクト〉ということになっているが、全体と個々が整理されていない。
 - ・同じ内容を繰り返すプロジェクトがあり、継続が目的になっていると言える。
 - ・〈市民プロジェクト〉でありながら、市が主催であるプロジェクトが存在した。
 - ・新潟市の芸術祭なのに、新潟市外の〈市民プロジェクト〉が存在した。
- 市民プロジェクトは本当にすごいのか。
 - ・〈アートプロジェクト〉を継続的な〈市民プロジェクト〉に繋げている実績があるのは素晴らしい。
 - しかし、それは過去の芸術祭のレガシー。今回の芸術祭は何を残したのかという

疑問がある。

- ・芸術祭がない間の2年間も〈市民プロジェクト〉は継続されている。
→継続性を担保した反面、補助金依存を助長するのか。(お金があるから継続できているのではないか。お金がなくなったらはたして継続できるのだろうか)
- ・補助金以外の支援（組織作りやファンドレイジング...）の弱さ。
→支援できる専門家の不在（※2016年9月アーツカウンシル新潟設立）
- ・実施団体・プロジェクト間のネットワークの弱さ。
→各実施団体で〈市民プロジェクト〉の枠組みへの認識に違い、温度差大。
(※比較対象：AAF参加団体)

○水と土の芸術祭と小須戸ARTプロジェクト

- ・2012年を機に、地域の課題に対して芸術祭をうまく“使って”きた。
→薩摩屋の活用、文化施設の連携、新規店舗のネットワーク化。
- ・目に見える成果としての「空き家活用」。
→2014年、2015年の旧割野屋、2018年の町屋ラボ。

(文責：M18AA505 玖島理与)